九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[003]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2231547

出版情報：九州人類学会報. 3, 1975-10-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

序

第3年次の「研究会」を了えて，会報第3号ができあがった。第2号で述べた抱負がどの程度達成できたかを反省するには，1年間の研究会の軌跡である会報をみていたゞく他はないだろうと思う。結果としていえることのひとつは，若い研究者層の研究を汲みあげることがなかなか困難だということである。これは，福岡地区における人類諸科学がまだまだ未発達で，研究者の層が極めて薄いということと同時に，学際的協力体制が未熟な九州地区の学問の構造にも一因があるようである。

九州大学を日本に残された最後の「帝国大学」である，とある人が述べたのを聞いたことがある。旧帝国大学としての余光をいたゞいてはいるものゝ，構造的にも内容的にも，日本における九大の地位は全般的に没落しつゝあるのではなかろうか。九大が九州地区の学問を代表するものでないことは云うまでもないが，ひとつの象徴的事例として引用したまでである。人類学はその学問的性格からして，総合科学的傾向をもっている。したがって人類学は，タテ意識の感覚とは本来相容れない性質を有しているのである。福岡に足りないのは，学問が自由に論じられる談論風発の場としてのサロンの存在ではないかと思う。K．マルクス，M．ヴェーバー，B．フランクリンなど，世界史に大きな足跡を残した人々の思想の熟成された場が，サロンやクラブでの自由な討話にあったことはよく知られている。さゝやかではあっても，九人研の人々によって，研究会とは別に，良い意味でのサロン的風土が育ってゆくことを期待したいと思う。

九州人類学研究会会長

綾　部　恒　雄